詩集

芥川龍之介

彼の詩集の本屋に出たのは三年ばかり前のことだつた。彼はその仮綴(かりと)ぢの処女詩集に『夢みつつ』と言ふ名前をつけた。それは巻頭の抒情詩(ぢよじやうし)の名前を詩集の名前に用ひたものだつた。

　　夢みつつ、夢みつつ、
　　日もすがら、夢みつつ……

　彼はこの詩の一節ごとにかう言ふリフレエンを用ひてゐた。

　彼の詩集は何冊も本屋の店に並んでゐた。が、誰も買ふものはなかつた。誰も？　――いや、必(かならず)しも「誰も」ではない。彼の詩集は一二冊神田(かんだ)の古本屋(ふるほんや)にも並

んでゐた。しかし「定価一円」と言ふ奥附のあるのにも関(かかは)らず、古本屋の値段は三十銭乃至(ないし)二十五銭だつた。

一年ばかりたつた後(のち)、彼の詩集は新らしいまま、銀座(ぎんざ)の露店(ろてん)に並ぶやうになつた。今度は「引ナシ三十銭」だつた。行人(かうじん)は時々紙表紙(かみべうし)をあけ、巻頭の抒情詩に目を通した。(彼の詩集は幸か不幸か紙の切つてない装幀(さうてい)だつた。)けれども滅多(めつた)に売れたことはなかつた。そのうちにだんだん紙も古び、仮綴(かりと)ぢの背中もいたんで行つた。

　夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

三年ばかりたつた後、汽車は薄煙を残しながら、九百八十六部の「夢みつつ」を北海道へ運んで行つた。九百八十六部の「夢みつつ」は札幌の或物置小屋の砂埃の中に積み上げてあつた。が、それは暫くだつた。彼の詩集は女たちの手に無数の紙袋に変り出した。紙袋は彼の抒情詩を横だの逆様だのに印刷してゐた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

半月ばかりたつた後、是等の紙袋は点々と林檎畠の葉かげにかかり出した。それからもう何日になること

であらう。林檎畠を綴つた無数の林檎は今は是等の紙袋の中に、——紙袋を透かした日の光の中におのづから甘みを加へてゐる、青あをとかすかに匂ひながら。

夢みつつ、夢みつつ、

日もすがら、夢みつつ……

（大正十四年四月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。